

《正岡子規（36）の続き》その311

天涯茫茫生

列伝⑪ 岡 麓（本名 三郎）

生年 一八七七（明治一〇）・三・三
歿年 一九五一（昭和二六）・九・七
享年 85歳
死因 不詳

歌人にして書家。

東京市本郷区金助町一番地（通称湯島傘谷^{かやだに}）に、岡 良節の三男として出生。岡家は代々幕府の奥医師であつた。住所名にちなみ、別号は傘谷^{かやだに}、三谷。

明治15年、6歳にして市河万庵の門に入り、13歳まで書を習う。

26年、府立一中を退学し、大八州学校に入り、佐々木信綱に和歌の添削を受ける。また書家多田親愛に本格的に書道を学ぶ。

この頃、香取秀眞を識り、31年ある短歌会で伊藤左千夫とも識つた。

32年1月末、香取と共に子規を訪ね、ここに子規の門下となつた。

この3月、はじめて開かれた根岸短歌会に

出席するようになり、33年、長塚 節^{ふで}と同門となることとなる。従つて、香取、麓、左千夫、節は相前後して子規門となるのである。

34年11月、東京菊地はるの養女春と結婚。

36年、伊藤左千夫が根岸短歌会の機関誌「馬酔木^{しび}」を創刊、麓も編集同人となる。その頃、齊藤茂吉、中村憲吉、平福百穂を次々に識る。その後、各種の学校に勤務し、また自宅に書の塾を開いた。

大正5年40歳のとき「アララギ」に短歌を寄稿し、50代、60代、晩年を通じ、「アララギ」同人として作品を発表、また各地に講演し「アララギ」の興隆につくした。

昭和24年、日本芸術院会員に推された。26年、疎開先の長野県で死去した。

岡が子規を識つたのは明治32年2月とされているから、子規との関係は3年7カ月に過ぎない。しかし子規とはかなり親密な交際を結んだらしく、講談社版『子規全集』には16通の麓宛書簡が残されている。

これらの書簡から子規との関係をさぐることとする。

書簡番号 737 32年2月11日発

先日は御光来被下候ところ臥褥中失敬致候とあり、春日望山の短歌二首を添えている。山近くいほりむすびて永き日をただ山を見る人となるべく

書簡番号 743 32年3月13日発

十四日、才屋スギヨリ、歌ヲヨミニ

ワタクシ内ニ、オイデクダサレ

この頃、子規は短歌の革新を始めだし、口語の歌を「はがきノ歌」として諸方に出している。同日、香取香眞（秀治郎）にも、同様のはがきを出している。

明日ハ、君ガイデマス、天気ヨク、

ヨロシキ歌ノ、出来ル日デアレ

三月十四日の歌会は、会者6人で最初の根岸短歌会であつた。

書簡番号 794 32年11月5日発

岡が柿をみやげに持参したものを、辞去後に家人に見せられ、がまんがきれ、とうとう一つねだり食べたことを書き、当地では蜂屋、郷里では祇園坊^{ぎおんぼう}といい、天下に柿は多いが、この柿にまさるものはない、郷里を出て二十年ぶりに食べたこのよろこびを書く。

鄙^{ひな}にては祇園^{ぎおん}ぼといふ都にてははち屋

ともいふ柿の王はこれ

味はひを何にたとえん形ちさへ濃き

くれないの玉のごとき柿

柿好きの子規が天下第一ともいうべき柿を貰い、これ以上の喜びはないとの喜びを、歌にしたものがこれである。